



玉子王子 著

## 一章 夢の世界で玉蹴り行脚

「大吉だったね」

「そうらしいね」

AIの発達した未来。

もはや人間は働くこともいない。星々をめぐり、資源を開発して輸送するなどの仕事もすべてAIが行うため、何もする必要はない。人類全体が保有する資源は必要量をはるかに超え、奪い合う必要もなくなっていた。

コンクリートの校舎。

中に並べられた机。女子校。

少女らの話題は昨日発表された新たな元号についてだった。

「戦国武将の？ 旗印からとったんだってね」

「それを記念して、大河ドラマの主人公、その武将にするって。石田三成とかいう人だって」

遥かな超未来。

この星の人間は、西暦二〇〇〇年代ごろの習慣を模して暮らしていた。

この人口百万程度の寂れた星だけではなく、日本人は大体そうして暮らしていた。

ある種のノスタルジーといえるだろう。

そのノスタルジーで人々が繋がっていることが、人類の文明圏の中で日本だけが唯一国という枠組みが残っている理由なのかもしれない。

人が生きるのに必要な資源がすべて供給される時代において、国家の必要性などないのだ。治安維持もロボットに搭載されたAIがすべて行ってくれる。そもそも犯罪はほとんど起らない。あらゆる資源が欲しいだけ手に入る世の中では、本物の生まれつきの犯罪者以外は犯罪だの揉め事だのは起こさないのだ。

少女二人に、眼鏡で細目、巨乳の少女が近づいてくる。

「戦国時代に興味あるの？」

「え？」

「いや、別にないけど」

「石田三成が大河の主役やるのは、今回で記念すべき五〇〇回目なんだよ」

「へえ」

眼鏡の少女、吉川はいわゆる歴史オタクだった。

戦国時代など彼女の時代から見ると十万年ほど前の事だが、見てきたように語りだす。

が、二人はあまり聞いていない。

「それよりさ」

「それよりって……」

「私たち戦争部なんだけど、吉川も今日来ない？」

この時代、多くの部活は夢の中で行う。

寝ている人間の脳波に干渉し、夢を操る機械がある。それ同士がつながり、ある種のネットゲームが可能になる文字通り夢の機械だ。

開発されてから数万年が経ち、人間やAIが開発した無数のコンテンツが存在している。コンテンツを作るツールも充実していて、自分専用の夢の世界を簡単に作っていける。

人を入れるも入れないも自由である。

その夢の中に部員が集い、様々な活動をするわけだ。会社を作るもよし、戦争もよし。

「戦争部っていうと……第一万五千次世界大戦ぐらいの時代かな？」

「惜しい、二回目！」

「全然惜しくないじゃん。第二次っていうと……石器時代？」

歴史も趣味もデータが膨大ですべて無料であるため、好きな分野以外の知識はほとんど薄くなる。

夢のようなふんわりとした会話の後、行けたら行くと嘘をついて二人と別れる吉川。

家に帰る。

マンション風の建物。

西暦で言えば十万年を超えるこの時代から見ればノスタルジーにあふれまくったデザインといえるが——とはいえ最新の凄いデザインというものもない、停滞した時代である——その中で暮らしている吉川には特に何という事もない普通のデザインである。

電子レンジのような機械を操作する。

ピ、という音とともに中に瞬時に皿と焼き立てのステーキが現れる。

3Dプリンターの高度な物だった。ナノマシンでプリンターの大きさまでなら何でも作れる。もちろんあまり危ない物は作れないように制限されているが。

原材料は水道のようにパイプラインで無限に送られてくる。

無料である。

やろうと思えばこのマンションの一室で一生快適に過ごせるのだ。

人間と区別がつかないAIの搭載されたロボットもいくらでも作れるので寂しくもない。

労働も競争も奪い合いも消滅した、満たされ切った時代。

人々はただ豊かに暮らし、国々もほぼすべて消滅。

日本だけがノスタルジーの中に二千年代の生活を模して存在し続けている超未来。

二千年代の女子校生のような生活をしている少女、吉川春が見る夢は彼女の趣味に合わせた、戦国時代風の世界。

「さ、続き続き」

ベッドに横になる。

特に何もつけない。脳に末端を埋め込む方式すらすでに化石のように古い技術、空気中にナノマシンを散布して、それが脳波を拾って周囲に伝える方式が開発されてから数万年未来である。

夢マシンもヘルメット等を被る必要もない。

使おうと思って目を瞑れば、視界の中にインターフェースが浮かぶ。

目を覚ます。

粗末な布団。

質素な着物姿。のはずだが、時代考証がまずいのか、かなり現代というか、2000年代風に見える。

が、吉川は気にしない。

ちなみに、眼鏡もしている。そもそもファッションでつけているだけなので、夢の中では別に外してもいいのだが、なんとなくつけたままにしていた。

「うひょ、ぼろいぼろい。窓もないし」

ボロ小屋。

全体がほぼ土間で、一角だけ床を上げているだけの構造。そこに布団を敷いて寝ている。

草履をはいて降り、壁にある窓代わりの板を押す。窓がないというより、窓ガラスの類がないという事だ。

開いて板で支える。

「そうそう、最後にここで泊って終わったんだったわね」

寒村。

枕もとの脇差と打刀を帯に指す。女の着物だと刀を差せないはずだが、帯が男用なので行けるといいう理屈だ。

相当適当な**時代劇風世界**なのうかがえる話である。

と、家の外から声。

「吉川春どの！」

男の声。

出ると、武芸者らしいごつい男が立っていた。三五歳ぐらい。若いといえば若い、吉川から見れば二倍ぐらいの年である。

「拙者、小南憲章と申す。主から高名な吉川殿に折り入ってお願いがあつてまかり越した次第ですが……」

「が？」

朝っぱらから何か叫んでいるので、村人らが恐る恐る出てくる。

気にせず続ける武芸者。

「どうも、噂は所詮噂のようで……こんな若いおなごが、それほどの剣の使い手のわけがない」

主君というか、小南はその娘を護衛している——今「主」といっているのはその娘の方である。

主君の知り合いの家に送り届ける途中通りがかり、強い武芸者がいると聞いた。

そして女だから姫との間に面倒なことにもなるまいと、助力を頼みに来たわけだ。

が、若すぎて頼りなさそうなので気が変わったという話。

急に出てきた男に勝手に小娘では無理だと失望された吉川だが、別に怒らない。

——よくあるのよねえ、こういう武芸者に下に見られるの。股間にいろいろぶら下げてる**おチン○ンクラブの会員**じゃないってだけでさ……怒っても仕方ないわ。力見せてやればいいのよね。

小南は女だから、というより若すぎるから失望しただけだが、その辺誤解されても仕方ない流れだろう。

「へへ、私が頼りない……と思うなら、腕試しでもしてみましようか？」

「ぬ？」

「どうせ、死なない世界だしね」

そういうふうには吉川が設定していた。

AIとはいえ、刀でバッサリやった相手が死んでいくのはきつい。見た目は人間そのものだし、内面も人間と区別がつかないのだ。

そこで、死んだ人間は近くの寺なり神社なりで自動復活、という緩い世界設定にしていた。

怪我なども当然さっさと治っていく。

「ほう、面白い……拙者に勝ったなら、主に取り次ごう」

「それって変な話って気もするけど。そっちから頼んできたんだから、謝って「ぜひお願いします」じゃないの？ 知らへんけど」

ス、と音もなく刀を抜く小南。

吉川も合わせて抜く。

じりじり、と距離を詰めてくる小南。

刀を体の前で横に倒し、切っ先を敵に向けない。体を横に向けて、刀を隠すようにして進む。

脇構え。

対する吉川は正眼。

気合いとともに切りかかる小南。

何とか受ける。刀は結構衝撃で折れるという説もあるが、吉川はその辺面倒なので折れないように設定していた。

そういう世界に生きるAIは当然それにあわせて動く。

というわけで、ガンガンぶつけ合う。火花が散る。

押される、女子校生とオッサンである。腕力の差は歴然。

しかし、吉川には余裕があった。

——結構強いわこのオッサン。でもね、男だから……

「でやああ！」

思い切って振り上げ、踏み込む。体ごとぶつかるが、あっさり受けられる。

「ふん、こんなもの……」

「やあああ！」

受けられても、そのまま鏢迫り合いで押す吉川。

押しつつ、膝を押し込む。オッサンの太ももの間に。柔らかい物に膝が当たるのを感じ、内心ガッツポーズの吉川。

相手は顔を引きつらせる。

「はふっ！ あ、ちょ……」

ぐにゅ、と押す程度の弱すぎる蹴り。蹴りとさえ言えない。

それでも腰を引くオッサン。膝が締まる。

「ちょ、ま、よ、吉川殿っ、当たって……いま、当たってる、玉……」

バランスが崩れる。ここぞと押す吉川。

「てやあああ！」

「あ、ちょ、ま、はぐっ！」

ぐちょ、と今度は勢いよく膝蹴り。

感触に、ニンマリする吉川。

——あは、膝がグリッと、球体のモノ押し上げたのがわかったわ。なんだろ？ あは、女の子だからわからないわー、金ちゃんボールだなんてわからないわー。

周りで見っていた農民の女たちが手を叩く。

「きゃー！」

「やった！」

「蹴った！ 吉川様、お侍様のおキ〇タマ蹴っちゃった！」

「ぐふううううう」

刀を取り落とし、唇を噛んで股間を押さえる小南。

「あおおおおお、ちょ、ちょ、玉……」

意味もなくつま先立ちになったり、腰をグネグネと振ったりと少しでも痛みをましにしようという本能的な意味不明の動きをする。

「ふんむううう」

——こ、こんな、こんな小娘に金的を蹴られて刀を落とすなど武人として……し、しかし、玉……玉だけは……おのれ！ 吉川め、貴様も同じ目に……

チラ、と吉川の股間を見る。スカートのような着物のような服の前。

刀で肩を叩き、余裕で腰を突き出し、足を開く吉川。

「あははは、ごめんなさい。金ちゃん、当たっちゃいました？ お腹蹴ろうと思ったんだけど、ちょっと下がっちゃったかなあ？ お侍さまの大事なところ、女の子に蹴られるところ、大勢の女の人に見られちゃって恥ずかしいですよ？ あは、でも男の人なら同情してくれますよ。ん？ あれ、女の人ばかりだわ」



「そりゃそうよ。だって吉川様ときたら、玉ばかり狙うんだから！」

「男どもはビビって早々に畑仕事に出ちゃいましたよ」

「狙ってないですよー。大事なおキャン玉をわざと狙うなんてそんな……あっ」

「ふおおおお！」

脇差を抜き、切りつけてくる小南。

仰け反ってかわし、同時に爪先を跳ね上げる。ぐによ、と優しく持ち上げる程度に加減した爪先金蹴り。

これも先ほどの鏝迫り合いからの膝押し込み金的同様、吉川流の技の一つ、その名も……

「天秤！」

「ふぐっ！」

振われた動きのままに吹っ飛ぶ脇差。

「きゃっ！」

「ぎゃははは！ また玉！」

「ぐんむううううう、おおおおお」

股間を押さえ、棒立ちの小南。

その顔を覗き込む吉川。形だけは心配げだ。

「大丈夫ですか？ うふふ、今のも当っちゃいましたよね？ おキ・〇・タ・マ。でも今のは軽くだから大丈夫ですよ」

「き、き、きさま、こ、ここばかり狙って、卑怯な」

「わざとじゃありませんよ！ うふふ、だってそこ狙ったら、男の人は一発だし……でも、わざとでないにしても、三回もやっちゃってかわいそうなので、お詫びのしるしに」

「やらせてくれるのか？ あ、ちょ」

「おらー、何言ってんだてめえよう」

股間を押さえる手を掴み、引き離す。本来勝負になる腕力ではないが、倒すために思いきり行った膝金が効いていて力が入らない。

無防備な股間。

見下ろし、舌なめずり。

「へへへ、がら空きですよ？」

「あ、やめ……はうっ」

膝を締めるが、細い吉川の足はあっさり入ってくる。

寸止めし、慎重に股間に押し当てる。

「ひ、ひ」

グリグリと、膝で転がす。

「うふふ、面白い感触。女にはない、男だけの臓器の感触と思うとさらに変な感じ。うふふ、何度やってもいいわね。男の人の不安そうな顔が最高に笑えるわ」

「ふ、ふざけ……」

「ほい」

「はぐっ！」

わずかに下げ、ごちゃっと押し上げる。

「ふぐううう」

「あは、苦しそう苦しそう。私より長い時間頑張って修行してきた、力も強い大の男が軽く膝で蹴られただけで苦しそう。臓器をやられて「ふぐうう」とか言ってる。うふふ、大変ですねえ？ 付いちちゃってる……コーガンが！」

熱いため息をつきつつ、腰を引いて頭を下げる侍を見下ろす。

と、周りに農婦たちが集まってきていた。

「見てみて」

「あは、あんな蹴りでこんなに苦しんじゃって」

「急所痛はマジでどうしようもないわねー」

「お侍様、キ〇タマ大丈夫ですか？ プッ、女の子に蹴られちゃった、男の急所大丈夫ですか？」

「やだ、お侍様がお尻振り出しちゃった！」

「キ〇タマダンスきたきた！」

南蛮とも取引があるので、そちらの言葉も入ってきている設定だった。

顔を真っ赤にする侍。

「ぶ、無礼だぞ！ **どんファーマー**ども！」



「きゃ、どんファーマーだって！」

「どんファーマーの上に腐れマ○コ……最下層の人間が侍相手に……あ、お前ら何を」

「今の発言は許せませんわなあ」

にやにや笑いつつ、十人以上の農婦たちが股間を押さえて踊る侍に群がる。

手を押さえ、足を開かせる。

「あ、あ」

「お侍様、これからどういう目に合うかお分かりですか？」

「うふふ、みんな！ お侍様は強いから……私たち女の子は、キ○タマばかり狙おうね！」



「お前らふざけ……ふぐっ！」

爪先で持ち上げるような軽い蹴り。

それでも十分だとわかっている、金的に慣れた女たちがニヤニヤ笑って侍の顔を覗き込む。

「どうですかー？ タマ！ 男の大事な、二個玉！」

「ぐ、ぐふうううう」

「あは、苦しそー」

「玉ついてなくてよかったわー。金的蹴って、自分はこうはならないと思うこの瞬間が、女に生まれてよかったと一番思う瞬間だよね」

「ねえお侍様、おチン○ンなんてないほうがよかったでしょ？」

「そ、そんなこと……おぐっ！」

「玉コロキーク！」

「ふむおおおおお！ あ、ちょ、あつ、はぐっ！」

お遊びのように楽しそうに、軽く次々男の股間を蹴り上げる農婦たち。

「あがつ！ あごおおお！」

腰を振り、必死で避けようとするが避ける余地はない。

「そらそら、コーガンつ・ぶ・れ・ろ！」

「謝っちゃえ謝っちゃえ、お侍様、農民の女相手にキ〇タマ蹴りはやめてって謝っちゃえ」

囃す吉川。

顔を歪められるだけ歪め、避けられないとわかっていながらもなんとか必死で腰をひねってよける小南。笑いながら金的蹴りの農婦たち。

「そーらそら」

「謝っちゃえ！」

「あごいおおお！」

——で、できるかそんなこと。こんな、一対一なら絶対勝てる女どもに、この俺が……武人の俺が謝るだと？ 玉だけは許せと……できるか！ で、でも、玉、玉がっ……治るからって、こいつらマジで潰しに来て……あ、あ、もう……

「ちょ、やめ……許してください！」

「ぎやはは！」

「もう心折れた？」

「鍛えた武芸者も、誇り高き侍も……男に生まれりゃ、女に捕まり金的キックされたら心が折れると」

「キーンキーン！」

「はぐっ！ やめっ、ふぐっ！」

「オラオラオッサン、陰囊縮み上がってるか？」

「うんぐううう」

時々蹴りをやめ、反応を楽しむ農婦たち。当然、吉川もニヤニヤと見ている。

顔を真っ赤にしつつ、笑われるとわかっていながらも少しでも痛みをましにするために、腰を引いてグネグネと捻じり、振る。

と、もちろん指さして笑われる。

「見てみて、玉蹴りダンス！」

「男だけの内緒の踊り来ましたわ！」

「さっきからタ〇キン蹴られて踊り続けてるよね、この人！」

「き、貴様ら、せ、正々堂々と勝負しろ！ 金的無し！ 一対一で、男らしく！」

「へー？」

「金的無し、一対一。それが男らしくっていうなら、女らしくはどういうルールっすかねえ？」

「そりゃ、金的集中攻撃、多対一でしょう」

「あは、じゃあ私ら今やってんじゃん」

「女の子戦法行くぞー！」

「はぐっ！ あおおおお！」

弱いというか訓練自体したことがない農婦たちの金的蹴りの嵐に、圧倒的に強いはずの武芸者がのたうち回り続ける。

手を叩き、笑い続ける吉川。

体験版終わり

この後も吉川、金的、色仕掛け、逆レ○プとドSぶりを発揮していきます。

続きは製品版でぜひお楽しみください